

恋
カ
フ
エ

目次

君に珈琲を side 青山透	二人でカフェ	はじめてのコーヒー
263	157	5

はぐろのスター

プロローグ

『今日の山羊座のラッキーカラーは緑。ラッキーアイテムはボールペン。何か失敗しても笑顔を忘れないで。いいことがあるかもしれない。気分転換に音楽を聴くと吉』

「早苗さなえつ、早く降りていらっしやい。また遅刻ぎりぎりになるわよ」

「はい。今行きます」

自分の部屋でテレビの占いコーナーをチェックしていた村野早苗は、階下から母親に呼ばれて焦あせった。

慌あわてて緑のインクのボールペンを探し出し、バタバタと下へ降りる。

「なあに？ ひよつとして、また占いを見てたの？」

食卓についたとたん母に声をかけられ、少しばつが悪い。とつくに朝食を終えてお茶を飲んでいた父からも呆あきれたような視線を受けてしまい、なおさら居たたまれない気分になった。

「いいじゃない。好きなんでもん」

「でも、学生じゃあるまいし……いつまでもそんな子供っぽいものに夢中になって。あなたもう社会人なのよ？」

「わかつてるわよ。でも……」

痛いところをつかれ、早苗は口ごもる。

新卒で今の会社に入社してそろそろ半年になるが、なかなか学生気分が抜けない。朝食を母に作ってもらったり、部屋の掃除をしてもらったりと、つつい親に甘えてしまっし、どんなに忙しい時でも占いのチェックはやめられない。

「占いくらい、いいじゃないか。誰に迷惑をかけるでもなし……」

「そうだよね。お父さん」

父親がフォローしてくれ、早苗は勢い込む。

「だいたい私がちよつと無理かもつていう大学に受かったのだから、占いのとおりに行動したおかげだし」

「はいはい。だから占いはとっても大切だし、あなたの生活に欠かせないのよね」

母は苦笑している。

「そうやって笑っているけれど、受験の時だけじゃないのよ？ バイトや入社の面接の時も占いのアドバイス通りにしたら受かったし……」

占いは何かに迷っている時や、新しいことをはじめたいけれど勇気がもてない時に早苗の背中を押してくれる。

この感覚を他の人にうまく説明できないのがもどかしい。

とにかく早苗は昔から何かと占いに助けられていて、今では朝の占いをチェックして出かけるのが日課だ。

「そんなに占いが好きなら、初詣で引いたおみくじにあやかっつて見合いでもしてみる？」

ボンと両手を打って母親が微笑む。

唐突な台詞に、早苗は一瞬ぼかんと口を開けてしまった。

「な、何？」

「ほら、今年の初詣で引いた早苗のおみくじに、良縁ありつて書いてあったじゃない」

「も、もう何考えてるの？ 私やつと社会人になったばかりだよ？」

冗談だとは思うけれど、本当にお見合いなんてさせられたらたまらない。早苗はふるふると首を振った。

「別にいいじゃない。昔と違って、結婚しても専業主婦になる人のほうが今は少ないし、結婚して仕事も続けられば」

占いばかり気にするなどという忠告をこめて、母はお見合い話など持ち出したのだろう。

早苗だって、占いに頼りきりではないけどと自覚している。

でも、わかっているけれど止められない。早苗にとって占いは、もう生活の一部になっているのだ。ただの習慣かもしれないけれど、「占いをチェックしておいてよかった」と思うことがけっこうある。

だから、占いをチェックしないで出かけるのは、すっぴんで出かけるのと同じくらい有りえない。

「栗野さんに頼んでみるか？」

父まで、近所で有名な仲人好きの人の名前を上げだしたから、たまらない。

「やめてよー」

「なんだ？ 好きな人でもないのか？」

父の問いかけに、早苗はぎくりとする。

「い、いないわよ」

否定したけれど、本当はいる。

ただ、相手の名前すら知らない、完全なる片思いなのだ。

彼の姿が鮮やかに脳裏に浮かぶ。今日も会えるだろうか？

そんなことを考えていたから、つい顔がにやけてしまったのだろう、父に妙な顔で見つめられた。

「と、とにかく、まだ見合いとか結婚は早いから……、いつてきます」

早苗はこれ以上お見合いをすすめられないうちにと、慌てて食卓を離れた。そしてそのまま家を飛び出した。

会社の最寄り駅に降り立った早苗は、駅前のロータリーで立ち止まる。今日もいつもの彼に会えるだろうか。

お見合いだなんだと家で言われた時、思い浮かべた片思いの彼。

早苗は毎朝通勤路の途中にある公園ですれ違う男に、ずっと恋している。

名前も年齢も、何をしている人なのかも知らない。

それでも……

好きだ。

初めて彼を見たのは、入社して間もない頃。

占いで、いつもと違う道を通るとラッキーなことが起きると言っていたから、通勤路を変えて公園を横切るルートを通ってみた。

田周にすると一キロくらいの公園には、早苗と同じように通勤途中のOLやサラリーマンらしき人達がちらほらいた。

他にも、ジョギングやウォーキングをしている人達がいて、そのほとんどは近所のお年寄りか主婦といった感じだ。

早苗は普段通らない公園の様子を見るときもなしに見ていた。そこでジョギングしていた一人の若い男が彼だった。

早苗のほうに向かって走ってきた彼は、黒い上下のウェア姿で、うつすらと額に汗をかいている。背が高く、ウェア越しでもスタイルがいいのがわかった。

早苗は彼から目が離せなくなる。

精悍で渋くて、人目をひくものがあつたからだ。

早苗の友人や会社の同僚にはいないタイプで、包容力がありそうだ。年は三十歳くらいだろうか。すれ違った時、微かに汗の匂いがしたけれどちっとも不快じゃなかった。

早苗はしばらく男の逞しい背中を見つめていた。

次の日も公園を抜ける道を通ったら、また彼とすれ違った。

そんな日々を半年近く続けるうちに、早苗は彼を意識するようになった。今では彼の姿を見てすれ違うたびに、早苗の心は浮き立つ。

黒く強い光をたたえている瞳の奥に、優しさや暖かな物が感じられる。

今度思い切って、声をかけてみようかな。

ほとんどすれ違うだけとはいえず、毎日顔を合わせているのだから……

「おはようございます」の挨拶くらいなら不自然じゃないだろうし。

現に彼は他の通勤途中のサラリーマンやOL、ジョギングやウォーキングをしている主婦や老人と挨拶をかわしている。

早苗はそれが羨ましくて仕方ない。

本格的に彼が好きだと自覚したのはいつだろう？

いつからどんな風に好きになったのかはわからないけれど、今は彼の声を聞いたり周囲の人と雑談している時の笑顔を見たりすると胸が高鳴る。

とにかく彼が好き。

だから、最初は占いに従って選んだ公園の道に、今では占いとは関係なしに毎日通っている。

彼と会話をしてみたい。話し掛けてもらえたら嬉しいのに。

いつもそんなことばかり考えていた。

一

『今日の山羊座のラッキーカラーはオレンジ。ラッキーアイテムはマグカップ。』

仕事でミスをするかもしれないませんが、それも今後に生かせば大丈夫。くよくよしないで。また、想いを寄せる人と仲良くなれるかもしれません』

「申し訳ございません。デザイン部二課の羽田はただ今外出中で、十六時に帰ってきます」

ここは大手デパートを経営する会社の本社受付。この会社の受付嬢として働いている早苗は、訪

ねてきた相手にそう言い、頭を下げた。

次の瞬間、隣に座る先輩受付嬢に軽く咳払いをされる。

あ、やば……、私またまずいこと言っちゃったかも……

早苗の背中にさつと冷や汗が流れる。

「あー。そうですか。ではまた出直します」

「はい。そうしてください。お待ちしていますね」

やばい、と思いながらも早苗はにこりと微笑む。すると、羽田を訪ねてきた男もつられたように笑い、くるりと背を向けた。

早苗は先輩とともに頭を下げ、その男を見送った。

「はあ……」

男の姿が完全に見えなくなったところで、先輩が溜め息を吐き出す。

「村野さん、随分フレンドリーな応対ね」

「は、はい」

先輩である相川の反応を見て、早苗は内心ひやりとする。

今の相川の言い方から察するに、やっぱり自分が失敗したのは間違いなさそうだ。

「えっと……、すみません」

早苗は素直に頭を下げた。

「うん。もつときちんとした言葉遣いをするべきだったわよね？」

「はい。あの、『十六時に帰ってくる』じゃなくて、『帰社予定』と言うべきでした」

早苗の背中にはまだ冷や汗が流れている。

「そうね。それに今の人、滝野川たきのがわ繊維せんいの人で、布地販売の営業に来ているのよ。でも、今うちの会社では必要ないからって、すでに何度かお断りしているの」

言われて、確かに今の男はよく見る顔だと思いつく。

「だから私達受付も、お引き取り頂くように伝えているの。なのに十六時に戻ってくるとか言っちゃって駄目じゃない」

「え、はい……」

そんな経緯があったとは知らず、早苗の返事は申し訳なさから小さな声になってしまふ。

今日のラッキーカラーにあわせてオレンジのマニキュアにしたんだけど、よくないことが起きた……

少し沈みかけたけれど、気持ちを切り換える。

ああ、メゲちゃ駄目。

今日のはじまったばかりだし、頑張らなくちゃ……

早苗は心の中で活を入れて、背筋を伸ばした。

そして相川に尋ねる。

「あの……」

「何？」

「営業の方は……。今の方は今後もお通ししたらいけないんでしょうか？」

そう聞くと、相川はあきれた表情になった。

「そうよ。羽田さんの態度や雰囲気、そうしたほうがいいだろうと思っただから、さりげなく聞いたのよ。本社の受付ともなればそういうのも察知して、色々配慮すべきなのよ」

今、この受付ロビーには、自動ドアの脇に立つ警備員以外誰もいない。そのため、もちろんひそひそ声でだが、こういう話をしていられる。

「はい。すみません」

理由を知って納得した早苗は、相川に謝る。

「押し付けがましいって思っているかもしれないけど、あなたのためを思って言っているのよ……」

早苗がしよげているのを察してか、相川はそう付け加える。

「それとも、そんなに言い方とかきついか私……」

今度は相川がうなだれはじめ、早苗は焦る。

「あ、えっと、大丈夫です。もう慣れました」

言ってしまったから、早苗はあつと声を出す。

「あー、その、違うんです……」

どうして私はこういう言い方しかできないんだろう？

口下手で、気持ち先走っていつも失言してしまう。

相川は諦めたような笑みを浮かべている。

「私もあなたのそういう言い方に慣れた」と言いたげな顔だった。

「すみません私、あの……」

自分が何かやらかしてしまった時に、忠告してもらえるのはありがたい。本当に頼りになる先輩だと思っている。

それをなんとか伝えたくて口を開くが、エレベーターを降りてきた来客に阻まれた。

就職の面接に来ていた女子大生や、会議に参加していた支店の社員達だ。

彼らは入館証を戻しに受付にやつてくる。少し遅れて、他のお客様もエレベーターを降りてやつてきた。

そのせいで早苗は相川にきちんと謝る機会を無くしてしまった。

早苗は女子大生の相手を、相川は社員達の相手をはじめ。

来客は受付が混んでいるのを見て、少し離れた場所で待っていてくれる。早くその方の相手をしなければと思うが、焦るあまり、すぐ次の行動に移れなかった。

「君、車のキーを」

少し急いでいる様子の相手にそう声をかけられる。

その声で我にかえった早苗は、慌ててお客様から預かった鍵の置き場所を探る。するとそこには、二つの鍵がかかっていた。

「あ、恐れ入ります、お客様の鍵は……」

二つの鍵を持ち上げ、どちらでしょうかと続けようとした時、横から相川の手がさっと伸びてきて、お客様に鍵を渡す。

「お、ありがとうございます」

そう言つて、鍵を受け取ると去っていった。

相川の見事な受付さばきを間近で見た早苗は、感激しながら仕事を続けた。

「村野さん、ちょっといいかな？」

一段落ついて、ブースの前から誰もいなくなつたとたん、やや尖つた口調で相川から声をかけられた。

「あ、はい」

「受付に配属されて数ヶ月経つんだし、そろそろ大勢のお客様が一度に来てもうろたえないようにならなきゃね」

やはりそれかと、早苗はしゅんとなる。

「すみません本当に」

自分の不手際で、お客様を待たせてしまった。

「それに、さっきのお客様の車の鍵の件だって、しょっちゅう車で来ているのはあの方だけなんだから、どういう鍵なんだか、もう覚えてもいいはずだけど？ だいたいあのキーホルダーはかなり特徴があるじゃない。いい加減、知らないとか、覚えていないじゃすまされないので。これから気をつけて」

それきり相川は前を向いて、いかにも受付嬢というすました顔になった。もう何か話しかけられる雰囲気ではない。

ああ。もう……。なんか気まずい。

私、受付の仕事に向いてないのかもしれない……

このところ早苗は頻繁にそう感じている。

入社したての頃は色々覚えなければいけなかったし、社会人としての生活のペースを掴むのに一杯で、そこまで考える余裕がなかった。だが最近少し慣れはじめたせいか、そんなことばかり考えてしまう。

そもそも早苗がこの会社に入社したのは、学生時代にこの会社が経営するデパートの地下でバイトをしていた時、接客がとても楽しかったからだ。大学を卒業してからも、ここに就職してデパートの売り場で働きたいと思っていたのに、何故か本社の受付に配属された。

人生が思い通りにいくことばかりではないことはわかってはいるが、出鼻をくじかれた気分にな

なった。

それでも、自分なりに精一杯頑張っている。

その頑張りが空回りしている気もするけれど……

ぼんやりと考えながら、ついこの間、学生時代の友達と女子会をしたことを思い出す。

その時、仕事に関する自分の思いを語ったのだが「そんなのみんな同じよ。多分誰でもそう感じるし、結局慣れの問題なんじゃないの」と友人には言われた。

そしてそのまますぐに、恋の話になってしまった。

恋の話に興味がないわけではない。早苗だって、恋をしたい。彼が欲しい。実際、公園で毎朝見かける彼に恋している。

でも、当面の悩みは、仕事だ。自分自身の資質の問題もあるし、先輩である相川との関係がうまくいっていないのも感じている。

どちらの問題も、自分で動き出さなきゃどうにもならないことは理解しているが、具体的に何をしたらいいのかわからない。その結果、余計に毎日の古いコーナーが気になるのだ。

そんなことを考えていたら、相川にわき腹をつつかれた。ハツとしてあたりを見ると誰かが自動ドアから入ってくる場所だった。

ジーンズに白いカッターシャツ、それに黒いカフェエプロン姿の男性だ。どこからどう見ても営業に来たサラリーマンではないとわかる。

目をこらしてその男性の顔を見ていた早苗は、自分の心臓が飛び跳ねるのを感じた。
えっ……

跳ねた心臓が踊り出す。

彼だ。

早苗の憧れの、毎日すれ違う彼……

そう思ったとたん、高鳴った胸が、さらに激しく鼓動を打つ。

やだ……。どうしよう……

なんで？ どうしてここに？

早苗は占いに従ってオレンジに塗った指のマニキュアを見た。

彼はガードマンに何か尋ねてから、真っ直ぐに受付に向かってきた。これまでトレーニングウェア姿しか見たことがなかったから、今の彼のかっこうは新鮮だ。

長い足で床を踏んで、彼が一步ずつ受付に近付いてくる。

「すみません」

受付の前でぴたりと止まった彼が、低く、やや掠れた声で言う。

あ、こういう声なんだ……

「はい。なんの御用件でしょうか？」

自分が応対したかったけれど、彼の声に聞き入っていた分、反応が遅れてしまった。ふと見ると、

相川は少しだけ目を輝かせ、彼と話している。

彼女も彼をかつこいと思っているんだということがわかり、早苗はやきもきする。

そんなことを考えながら彼を見てみると、彼は一度、前髪をかきあげた。かきあげた前髪は全部上がらず、額に少しかかっている。それが妙に男の色気を感じさせた。

彼は最初に相川を見て、それから次に早苗を見て「おや」という感じに目を一瞬見開く。

自分に気付いてくれたことが嬉しくて、早苗はほんのり頬を赤くする。

「君……、毎朝公園で……。この会社の人だったんだ」

彼は早苗を真っ直ぐに見て口を開いた。

「あ、はい。そうです」

勢い込んで答えると、コホンと相川が咳をした。

早苗は慌てて姿勢を正す。

「あ、すまない……」

早苗が注意されると気付いたらしく、彼は軽く頭を下げ、折りたたみの傘を差し出してきた。

「これ……。ランチに来てたうちの女性客の忘れ物……。この会社の制服を着ていたから持ってきたんだ。雨、降ってきたし、ないと帰りに困るだろう」

ぶっきらぼうな言い方だった。しかし、わざわざ届けにきてくれたのだ。想像していた通り、とても優しい人なんだろうと早苗は彼を見上げた。

視線が一瞬合う。切れ長の涼しげな目が柔らかく細められる。

早苗が注意されたことに対しての、ちよつとした詫びと挨拶のつもりなのだろう。それが嬉しく
て早苗は思わず微笑む。

「ありがとうございます」

頬がどんどん赤くなるのを感じながら、早苗は彼と少しでも言葉をかわしたくてそう言った。

「ああ。昼食時はまだ降っていなかったから、つい忘れたんだと思う」

隣で相川が咳払いしたのに気付いき、慌てて手続きの説明をする。

「ではお預かりいたします。あの、お名前のご記入をお願いします」

傘の持ち主に届けてくれた人の名前を伝えるため、早苗は来客名簿を差し出した。これで彼の名
前がわかる。

ペンを渡すと、彼は『青山透』と力強い字で名前を書いた。

青山透……

透さんっていうんだ……

やっと彼の名前を知れた喜びに早苗の頬は緩みそうになった。

早苗はさらに期待して透が住所を書くのを待った。が、透は名前だけ書いてペンを置いてし
まった。

来社名簿には住所や会社名を記入する欄もあるのに……

「あの……」

書いてもらおうと口を開きかけたが、その気配を察したように透は軽く手を振った。

「名前だけでいいかな。本当に届けにきただけだから」

そう言いながら早くも背を向けて歩き出す。

「あ、あの……」

追いかけようとした早苗を、相川が袖を引っ張って止めた。

「忘れ物を届けにきただけだし、名前があれば充分よ」

相川は小声で早苗に言ってからノートを取り出す。日々の記録ノートだ。

何時にどこから誰に宅配が届いた、など、ちよつとしたことを書き連ねる。そこに「傘の忘れ物
の届けあり」と書くつもりなのだろう。

「あ、ちよつと待つてください」

受付ブースの下に来客からは見えないようにちよつとしたカウンターテーブルがある。そこで
ノートを広げて記入している相川の手を、早苗は思わず掴んでいた。

「何？ もうすぐ来客の増える時間帯になるから、その前に記帳して、早いところ集積所を持って
いかなきゃならないのよ」

社内の忘れ物や落とし物を集めておく場所が地下にある。そこは集積所とは名ばかりのごみ捨て
場のような所だ。

「あの、その……」

このまま集積所に持っていかれてしまったら、男がわざわざ届けてくれた意味がないと早苗は思ったのだ。

それに傘には見覚えがある。総務の佐倉さくらの物だ。

「私が届けてきます」

早苗は相川の手から傘を奪い取ると、制止も聞かず走り去った。

* * *

「まったく……。いきなり飛び出していつちゃって……」

戻ってくると、相川の機嫌が最大限に悪かった。これから忙しい時間帯になるとわかっていたのに、相川の了承を得ずに持ち場を離れたのだ。怒られても仕方ない。

「す、すみません。でも……傘が誰のかわかったし、佐倉さん喜んでたし……」

「村野さんの気持ちもわかるけれど……」

相川のお小言がはじまるうとした時、自動ドアが開いた。外回りの仕事から帰ってきた社員だ。

「お帰りなさい」

「お疲れ様です」

相川と揃そろってそれぞれに挨拶あいさつをすると、社員が早苗に笑顔を見せた。

「君の笑顔はいいね。こっちまでなんだか笑顔になるよ」

「ありがとうございます」

嬉しくて早苗はますます笑顔になって、エレベーターに乗り込む社員を見送った。

「あー。もう……。本当に、村野さんって、笑顔だけはいいのよね」

相川がぼそりと呟つぶやいた。

「え、そうですか？　ありがとうございます」

明るく答えると、相川は大きく溜め息をつき、肩を竦すくめるような動作をした。

あれ？

早苗はそんな相川を見て、首を傾げた。

なんだかさつきも似たような雰囲気になっただけ……

あ、今のは褒められたんじゃないやなくて……

早苗は鈍感な自分が恥ずかしくって、耳まで真っ赤になった。

一日の仕事が終わり、早苗はロッカールームへ向かいながら、オレンジに塗った自分の爪を見る。今日のラッキーカラーはオレンジだった。

占いばかり気にするのはいい加減やめなきゃ、と思っっているけれど、今日の出来事を振り返り、

やつぱり占い通りのラッキーカラーのマニキュアにしてよかったと思う。頬が自然に緩んでしまうのを止められない。

このラッキーカラーを身につけたから彼に会えた気がするのだ。

相川さんには、またお小言をもらっちゃったけれど……

憧れの彼の顔をまさか会社で見られるなんて。

それに、名前がわかった。今日は、ものすごく進展した気分だ。

青山透。彼の名前を口の中で転がすようにして呟き、早苗は胸をときめかせた。

二

『今日の山羊座のラッキーカラーは白。ラッキーアイテムは文庫本。

いつもと違う店で、外食を試みるといいでしょう。特に南東にあるお店が吉。きつと運命の相手と巡りあえます。仕事は手を抜かずに』

「受付、代わります」

庶務の女子社員がそう言っ受付ブースにやって来た。

受付は常に二人体制だから、一人がお昼休憩に行っている間は、庶務から交代要員が来るのだ。

「よろしく願います。ではお先にお昼いただきます」

早苗は相川と庶務の女子にお辞儀をして立ち上がり、受付ブースを出て制服姿のまま外へ出る。

今日は早苗が早めに休憩をもらう番だった。朝の占いで、今日はいつもと違う場所で外食すると吉、と言っていたから社員食堂へ行くのはやめた。

しかし、いざ外に出てもなかなかいい店が見つからない。

どうしよう……。朝の占いでは、南東にあるお店がいいと言っただけ……

会社の南東は駅とは反対方向で、食事を取れるような店などありそうにもない。一瞬早苗は躊躇した。しかし、占いを信じて、足を進める。

今朝、占いの通り白のバッグを持って通勤したら、あの公園でまた透に会え、少し会話ができた。だからやつぱり食事する場所も占いに従うことに決めたのだ。

透とは受付に傘を届けにきてくれた翌日から、お互いに会釈をするようになっていたけれど、それだけで、進展らしい進展はしていなかった。

それが今日はすれ違う時に彼の肘が早苗のバッグに触れ、言葉を交わせた。

「すみません」「こちらこそ」といった程度だが、きちんと目を見て話せた。ちつばけなことだけ、早苗はとても嬉しかった。

そんなことを考えながら歩いていたら、透がどこかのお店で働いていることを思い出す。

この間の傘は、ランチに来た人の忘れ物って言うてたし……

ということとは、彼のお店も近くにあるってわけよね？

なんで今までそれを思い出さなかったんだろう。間抜けだな私……

透の店に行きたい。そう強く願いながら、南東にあたる路地に早苗は足を踏み入れた。

そこはマンションと雑居ビルしかない一方通行の道。

古びたマンションの一階にカフェ、というよりは喫茶店と呼ぶほうが似合う感じの店を見つける。

看板には『オアシス』と書いてある。

よし。

思い切って早苗は『オアシス』に入る。

まだ昼休みには早い時間のせいか、店内に人はまばらだった。二人組の若い女性と、営業帰りといった風情のサラリーマンが二、三人いる。

通りに面した窓は大きく、外の光をたっぷり取り入れている。外観から受ける印象とは違って内装は新しく、とてもおしゃれだ。

淡いグリーンの壁に白っぽい腰板を張り巡らせた店内、テーブルも椅子も腰板と同じ素材を使っている品が良い。各テーブルの上には小さな観葉植物があり、優しい雰囲気だ。

入って右手にあるカウンターは、女性が座りやすいようにという配慮なのか低めで、背の低い自分でも足が届きそうだ。

一人だし、カウンターでもいいかも。そう思いながら早苗は店内を見回す。と、壁に貼られたメニューに目が止まった。

そこには『占いセット。ドリンク付き千五百円』と書かれている。

占いセット？

早苗はメニューから目が離せなくなる。視線を張り紙に固定したまま、立ち尽くす。すると奥から出てきた店員に声をかけられた。

「いらつしやいませ。お好きな席にどうぞ」

「あ……」

やだ、私、立ったまんま、ずっと張り紙見てた？

恥ずかしくて口ごもると、男性店員に微笑まれた。

「占いに興味ありますか？」

彼は早苗が張り紙を見ていたのに気付いていたのだろう。

「え、はい」

もちろん、と心の中で付け加える。

声をかけてくれた店員は、早苗より少し年上の男性だった。やや茶髪で、どこかのアイドルに似ている。いわゆる今時のイケメンだ。

黒い長袖のシャツに同色のカフェエプロンをつけ、早苗を見て微笑み続けている。

「でも、そろそろランチタイムなんで、占いセットは今できないんですよ」
それを聞いて少しがっかりした。

「ランチは忙しくなるから、ゆつくり占ってあげられなくて。ごめんなさい。占いは夕方からなんです。なんなら予約取りますか？」

早苗は即座にうなずいていた。

「じゃ、五時半でいいかな？　っていうか、僕の記念すべき五十番目のお客さんだ」

男性の顔が大きく綻ぶ。

「えっ！　あなたが占いを？　それにちょうど五十番だなんて……。なんかラッキーです」

驚いて口早に言うのと、目の前の彼がぶっと噴き出した。

「ちよっ……。あのさー」

何がそんなにおかしいんだろうと、早苗は目を丸くする。

「君の性格って、わかりやすいね。占わなくてもわかっちゃうし」

「え、ええっ？」

「卓巳。ランチの時間だから早く準備に戻れ」

その時カウンターの奥から声が出た。聞き覚えのある響きに、ひよっとして、と期待しながらカウンターを見る。

やっぱり、透が立っていた。

トクン、と早苗の胸は高鳴る。

会いたいと、彼の店に行きたいと思っていたから自然と頬が緩む。

「あ、はい。先輩、じゃなかった、マスター」

どうやら早苗の前にいる男は卓巳という名前らしい。

「ごめんね。適当に席に座ってください。あ、それと、本当に占いを予約するなら、カウンターにある予約ノートに名前書いておいてね」

卓巳は早苗にそう告げると、慌てて店の外へ走り出た。表にランチメニュー表を貼りに行ったようだ。

早苗はカウンター席につく。

「あの、こんにちは。このお店の方だったんですね」

早苗は目の前の彼にどきどきしながら声をかけた。

「ええ、ここはマスターです」

透が笑ってくれた。

「あ、そうだったんですか」

まだどきどきしながら早苗は予約ノートを開き、自分の名前を書きはじめた。
生年月日、血液型を書く。

「ランチメニューをどうぞ」

ノートを見つめていると、水とメニューが差し出された。

「ありがとうございます。えっと、今日の朝はバッグが引つかかかってしまっすみませんでした。それから先日は、わざわざ傘を届けていただいてありがとうございます」

「そうかしこまらずに。座って」

いきなり立ち上がり、頭を下げながら一気にしゃべった早苗を見て透は苦笑する。

「あ……。はい」

ぺこりとお辞儀をして座りなおすと、また透に笑われた。

「えっと、あの、このAランチください」

笑われてしまったのが恥ずかしくて、すぐさま注文を決めてオーダーし、ごまかすように予約

ノートの空欄に自分の名前を書いた。

「村野早苗さんか」

ノートを覗き込んだ透に言われ、早苗はこくりとうなづく。

「毎日顔を合わせていたのに、今日まで名前を知らないでいたっていうのも不思議だな」

「あ、え、本当にそうですよね」

彼に自分の名前を知ってもらえたことが嬉しくて、早苗の体温がわずかに上がった。

「そういえば、スカートのシミは落ちましたか？」

「はい？」

何の話だろう？

「一週間くらい前かな、子犬がじゃれついて……」

「あ！」

そういえばそんなことがあった。

少し前に朝の公園で散歩中の子犬にじゃれつかれ、犬の足跡や涎でスカートが汚れてしまったことがあったのだ。

「あ、はい。大丈夫でした」

早苗は上擦った声で答える。身体が浮き上がりそうな気分だ。

あの時、犬が飛びかかってきたのは、透とすれ違ったあとだ。

なのに、自分のことを見てくれていた。見られていた……

恥ずかしいと思うべきなのか、見ていてくれて嬉しいと思うべきなのか少し複雑だ。

それでも気にかけてもらったと、最後には嬉しさが勝つ。

「あの、そのえっと……」

じわじわと顔が赤くなってくるのがわかって、早苗はうつむく。

「あ、いや、その……」

どこか照れたように透は視線を彷徨させたが、すぐに誤魔化すように占いの話をしはじめた。

「あー。その、卓巳の占いはそれなりに当たる。けど、あまり占いはかり信じすぎないほうが

いい」

そんな話をしていたら、卓巳がカウンターに入ってきて、口を尖らせた。

「やだなー、マスター。俺、占いはほんと、真面目にやるよ」

そう言うことから、卓巳は急に思い出し笑いはじめた。

「そうそう、村野さんって今時珍しいくらい素直だね。まさかあんな冗談にすぐひっかかるとは思ってもみなかった」

早苗は訳がわからず、きよんとする。

「君を喜ばせるための冗談で五十番目って言ったら信じちゃってさ。普通、本当に五十番ですかって、聞き返しそうなもんだけど……君、信じちゃうし。聞き返してくれば、すぐ冗談って言えたのに、言い出せなくなつて俺、悩んじゃった」

早苗は真っ赤になる。

「ご、ごめんなさい」

「いや、だから……」

卓巳は大げさに肩を竦める。

「おい。卓巳」

いつの間にか厨房へ行っていた透が戻ってきて、卓巳にパスタの皿を渡す。その顔は、どこなく怒っているようだ。

「はい。五番テーブルいつてきまーす」

透の顔が怖かったせいか、卓巳はそそくさといなくなった。

「悪かった」

ぼそりと呟く透。

「あの、私、気にしていませんから、マスターさん」

「さんはいららないよ」

「はい？」

何を言われているのかわからなくて、早苗は首を傾げる。

「マスター、コーヒーおかわり」

その時、隣に座っていたサラリーマンが言い、早苗は、ようやく『マスターさん』ではなく『マスター』と呼べばいいと言われたのだと気付く。

さん付けをするのなら、青山さんと言うべきだったかもしれない。

なんか、恥ずかしい。

「あ、すみません。青山さん……」

慌てて言い直すと、ふっと噴き出された。

「すまない。なんかそう呼べど強要してみたんで」

コーヒーを淹れながら、透は早苗に軽く頭を下げた。

「でも、店の常連は、マスターって呼び捨てか、透と名前で呼ぶかな。村野さんにもそう呼んでもらいたい」

あ……

胸がキュンとなった。

私にも、そう呼んでもらいたって……

「そ、それって……、あの、また来てもいいんですか？」

「もちろんだよ。常連になつてくれたら嬉しい。毎日でも歓迎だ」

常連になつてくれたらつて、それって……

客商売だから、営業の意味合いで言ったのだろうけど、それでも早苗は嬉しくなる。透の仕事振りを見つけながら、彼がきつと運命の相手に違いないと確信していた。

はじめてあの公園ですれ違った時からときめいていた。わざわざ傘を届けにきてくれた心遣いに、さらにときめき度が上がった。

今日は夕方にもまたマスターに、いや透さんに会える。

早苗はうきうきしながら昼食を終え、午後の仕事に戻った。

* * *

終業後、ふたたび『オアシス』を訪れた早苗の前に、ロイヤルミルクティーが置かれた。

「え、私これ頼んでいません。占いセットは確か、オレンジジュースかコーヒーがセットで……」

カウンター席に座る早苗は茶器を置いた透を見た。

「いや、待たせているから……」

確かに待たされている、と早苗は背後をちらりと見る。

卓巳の占いはどうやらOL達に評判らしく、大盛況たいせいきょう。基本は一人三十分だけれど、依頼者がその時間になつても粘つてあれこれ聞くらしく、一人十分〜二十分延長になることもざらなようだ。

今も早苗の前の予約にあたる女性が卓巳と話し込んでいる。

よく観察していると、みんなちらちらと卓巳を見ている。

どの女性も会社帰りとは思えないくらいにおしゃれだ。どうやら、彼の占いだけでなく、卓巳自身も人気があるようだ。

彼女達の服装を見て、早苗は急に自分の服がみずばらしく感じられた。

毎朝透とすれ違うから、それなりにおしゃれには気を遣っているつもりだったけれど……

昼は会社の制服姿で会った。フライトアテンダント風のスーツだ。髪はアップにしてスカarfを巻く規則がある。

その姿だったから、おしゃれも何もなかったけれど、今はとても気になる。アップにしていた髪をただおろして背中にし、カチューシャをしている。

前髪はちょうど眉毛のところで切り揃えていて、つい最近会った友達に学生みたいだと言われた。服だっけそう。会社では制服に着替えなければならぬため、脱ぎ着しやすい、Aラインのゆったりとしたワンピースを着ていた。

それが余計に学生臭い、いや、今時の学生のほうがもつと大人っぽいファッションだし、おしゃれだろう。

せめてもの救いで、メイクだけは受付に相応しい感じにしているけれど……

なんか、服とか髪型とか気にするのって久々だわ。

ふと早苗はその事実気付く。

彼氏いない歴三年だもんな。最低限のことしかしてなかった……

そんな風に思い、溜め息をもらす。

「嫌いか？ なら別な物にする」

カウンターのなかからいきなり透の手が伸びてきて、ロイヤルミルクティーの入ったカップにかか。

「え？ あ、いえ、好きです」

溜め息を誤解されたらしい。

「そうか。ならいい」

微笑んでくれたのだろう。透の口角が少し上がった。

「えっと、あの……」

急に気恥ずかしくなって、何かしゃべらなければ、と思った。

「ん？」

透はコーヒーを淹れながら早苗に視線だけ寄せす。

「そのですね、占い、こんなに人気だなんて」

「ああ。そうだな。俺もびつくりだ」

それっきり透は黙ってしまふ。どうやら彼は口数が少ないタイプのようだ。

けれども決して愛想なしというわけではない。順番を待つ早苗に、飲み物をサービスしてくれたり、さり気なく話しかけてくれたりして、優しさを感じる。

あの忘れ物の傘を届けてくれたのだから、根が優しい、いい人だからなのだとわかる。

「いつから占いセットをはじめたんですか？」

もっと透と話がしたくて早苗はそう問い掛ける。

「卓巳が来てからだ」

そこでいったん黙り、透は何故か難しい顔をした。

「三ヶ月前だ」

どうやら説明が足りないと思っただよう。

「大学の、なんだその……、オカルトとか占いとか神秘学とか心霊研究とかそういうサークルの後

輩で……」

透の言葉に早苗はびつくりする。透からはオカルト好きな雰囲気は少しも漂ってこないからだ。公園で毎朝見る彼は、寡黙なアスリートというイメージだった。実際毎朝ジョギングしているし、「それから、あいつに占いの手ほどきをしたのは俺だから」

さらに意外な事実を知り、早苗は混乱する。

その時、やっと早苗の番が回ってきた。

名前を呼ばれて卓巳がいるテーブルへ行く。

すかさず透が、元々頼んであった占いセットの飲み物を持ってきてくれた。

卓巳の手にはタロットカードが握られている。

普段星占いばかり気になっている早苗にはタロットが珍しく感じられた。期待に胸が膨らむ。

「さて、村野早苗ちゃんの相談は？」

にこりと卓巳に微笑まれ、早苗は妙に緊張した。

「仕事が……。職場の先輩となんだかいつもギクシャクしていて。仕事そのものも向いているかどうか気になって……」

そう告げたけれど、本当は一番占ってほしいのは透と付き合えるかどうかだ。けれども、すぐに本人がいるのに、そんな相談はできない。

「オケ。わかった」

少しだけ意外そうな顔をしてから、卓巳はタロットカードをシャッフルしはじめた。

早苗が自分で行なった経験のあるタロット占いは、大アルカナと呼ばれる二十二枚のカードを使うもの。今、卓巳は、それよりも多い枚数のカードを使っている。大アルカナに加え、小アルカナと呼ばれる五十六枚も使い、より細かく占える方法を採用しているのだろう。

卓巳は慣れた手つきでカードをさばき、一枚一枚めくっていく。

「これ、ウィッシュって呼ばれているスプレッドなんだけど……」

卓巳は説明しながらカードを並べはじめた。結果が出るまでは、無言で黙々とするものだと思うていた早苗は、そんな彼の姿を意外に思いながら問いかける。

「スプレッド？」

「うん。カードの展開方式。並べ方、とでもいえばいいのかな？ で、やり方は俺流なんだけど、スプレッドだけは昔からあるものだから安心して。カードは嘘をつかないし」

「あ、はい」

背筋を伸ばして答えると、微かに笑われた。

どうして私はすぐに笑われるんだろうか？ なんか、それを占ってもらったほうがよかったかも。などと考えているうちにも、卓巳の占いは進む。

「まず、早苗ちゃん、あなたはかなり素直な性格だね。別な言い方をすれば天然？」

「え、はあ……」

「言われない？ 天然って……」
ふるふると早苗は首を横に振る。

「んー、じゃあ、馬鹿正直とかは？」

「あつ、それは……」

身に覚えがあつて、早苗はうなずく。

「うん。だろうね」

と言つて、小さく笑われた。普段あまり怒りを感じない早苗だけれども、なんだかむかむかしてきて、つい眉間に皺しわを寄せていた。

「おい。卓巳」

笑いすぎている卓巳を窘たしなめるような声がカウンターから響いた。

「もう少しわかりやすく言ったらどうだ」

「やだー、マスター怖い」

「また卓巳くんをいじめている」

常連らしい客達の間からそんな声が聞こえて、早苗は自分が悪いことをした気分になつて肩を落とす。

自分のことが原因で、透が客から悪く言われてしまった。

「みんな、占い中にそんな大声あげないでー」

卓巳が愛想をふりまきながら、周囲を見回す。

それから卓巳は、ごめんねと早苗に謝り、占いを続けた。

「早苗さんは素直で真面目すぎる性格だね。冗談も真剣に受け止めるだろう？」

「あ……。そうかも」

「ひよつとしてさ、嫌味言われてても気付かなかつたりしない？」

「んんっ……。それもあるかも……」

当たっている、と早苗は目を瞠みはる。

「うん。だね。天然さゆえか、君は少し誤解されやすいタイプかもしれないね。占い結果を見る限り、仕事との相性は悪くなさそうだし、周りに君の敵となる人物もいない」

占い結果を聞き、早苗は少しほっとする。

相川とも、もつとよく話し合えば、仲良くなれるのかもしれない。

「あと君は今、仕事のことと悩んでるようだけど、今後はそれより男性に悩まされるかもね。今、

早苗さんは恋してるよね？ ほら、このカードが示している」

卓巳はテーブルの上に並んでいるカードの一つを指差す。それは早苗が知らない小アルカナのカードで、どんな意味なのかさっぱりわからなかった。

「え、こ、恋ですか？」

つい上擦うわすった声を出して、早苗は真っ赤になった。

まさか相手まではばれてないよね。

と、真うしろのカウンターにいる透を意識する。

「あ、やっぱ誰か気になる人がいるんだ？」

少しからかうような口調で言われて、早苗はますます赤くなった。

「そ、それは、でもやつと名前を知った程度だし、その……」

言いながら、本当は付き合いたいと思う。しかし、今ここで言ったら、透に告白するようになるのだ。

「おっけー。わかった。とにかく恋に悩まされるって未来が出ているから、当面はそっちを気にして。仕事については気になる結果は出てないし、あまり気にせずにとやるといいと思う。以上なんだけど、質問はある？」

「……ないです」

透とどうなるのか知りたい、と心の中では思っていたけれど、やはり本人がいるところでなんて無理だから、早苗は一呼吸置いてから口を開いた。

「ありがとうございます」

仕事のことを聞いたはずが、いつの間にか、恋の話になっていた。早苗はなんだかふわふわした気分になる。

とりあえず出された飲み物を一気飲みして、次の女性と代わる。

恋に悩まされる、ということは今後何かしらの進展がある、ということだろう。その相手は透だったらいいな、と早苗はひそかな期待を胸に抱いて『オアシス』を出た。

三

『今日の山羊座のラッキーカラーは黒。ラッキーアイテムは薔薇。』

運気アップのおまじないとして、コートをいったん裏返しにしてから着るといいでしょう。ヘアアクセサリーはつけないほうがベター。胸がときめく出来事がありそうです』

今日も一日の仕事を終えた早苗は、帰り際、会社のロッカールームでコートの袖を一回ひっくりかえした。それから元に戻して着る。

「何やってるの？」

相川に声をかけられて、早苗は振り返る。

「今日の占いで、一回裏返してから着ると運気アップってあったから」

素直にそう答えると苦笑された。

「まーた占い？ そりゃ私だって占いは好きだけど、ほどほどにしなよね」

最近、相川と前より親しくなれた。卓巳に占ってもらったおかげで、自分から積極的に話しかける勇気を持てるようになったからだ。

「この間も変なことしてたし……」

「なんですか？」

相川の言葉に反応して、着替え途中だった他の課の女子が、聞いてくる。

「受付カウンターの陰で、ハンカチを何度も折り畳んでいたの。お客様からは目につかない場所だったけれど、真正面を見たまま、ずっと手だけ動かしてるから、隣で見ている私はなんか怖かった……」

「あー、そういうえばそうでしたね、それ一昨日でした？」

受付には直接社員と会わなくても構わないからこれを渡しておいてくれ、という緊急を要さない訪問者もやって来る。

ちよつとしたサンプル品だったり、パンフレットの類だったりを置いていくのだ。

そういった品物を午前と午後の一回ずつ受付に回収に来る係がある。

彼女はその係だから、早苗の様子を知っているのだ。

「なんかしてるなーってわかったんですけれど、あれ、ハンカチ畳んでたんだ？」

「そう。ハンカチ。何でそんなことしてるのかって聞いたら占いだって言うから、びっくりした。仕事に支障があるわけでもないんだけど……」

と、相川はちらりと早苗を見る。

「相川さん、ごめんなさい。もうやりません。その……占いは見るかもですけど……」

恥ずかしくて、声が小さくなってしまふ。

「別に占いを見るなんて言っていないわよ。なんか、かわいい趣味？ だとは思ひ。ただ、お客様の前ではやらないですよ」

「はい。それはもちろん。いくら占いでも、お客様が変に思うようなことは一切しません」

「そんなの当たり前、基本中の基本」

最近、相川とはこんな風なやり取りができるようになっていた。

これも卓巳の占いを信じてアドバイス通りにした結果だ。

色々と話すうちにわかったことは、相川は大抵、早苗に腹を立てているわけではないということだ。

自分では普通にしゃべっているつもりなのに、きついなと思われてしまふ、直したいのに、なかなかうまくいかなくて悩んでいる、とまで言われてしまった。

「はい、お仕事頑張ります」

「あなたの笑顔、確かにいいわ」

ぺこりと頭を下げた早苗を見て、相川は微笑む。

「あ、今のは嫌味じゃないからね」

そのまま相川は片手を振ってロッカールームを出ていった。
苦笑しつつ早苗もロッカールームを出る。

会社の外に出ると、外は意外に暑かった。もう十月の末なのにコートがいらなくらいだ。それでも早苗はコートを着たまま『オアシス』へ向かった。

『オアシス』に行く時、早苗はいつもの公園を通り抜ける。

公園を抜けると遠回りになるのだが、なんとなくいつもここを通りたくなる。ここを通ったほうが何かいいことがあるような気がするからだ。

今日は彼と何を話そう。どんな会話ができるだろうか。

あれこれ想像しながら、遊歩道を歩いていると、カップルが目に入った。二人は早苗が通りかかったのにも気付かず、抱き合い、キスを交わしている。

わっ！

早苗は自分のほうが恥ずかしくなって、目をそらして小走りでその場を去った。

あんなところで恥ずかしい。いやらしい。そう感じるそばから、私もあんな風に透さんに抱きしめられてキスしてもらえたら……

今日は星空も綺麗だし、なんだかロマンチックな気もするし……

と、羨ましく思う気持ちも抱いた。

* * *

「あ、早苗ちゃんいらっしやい。ちょっとお久しぶり？」

『オアシス』に入るなり、卓巳の声に迎えられた。

卓巳は今日も占いをしている。今日の客は女子高校生だ。その子の相談を聞いている途中なのに、早苗に手を振ってきた。

「卓巳さん。ちゃんと占ってあげて」

早苗は思わずそう言っただけから、もう自分の定位置になっているカウンター席に腰掛ける。

あれからなんだかんだで『オアシス』に通い、最初の日に透に言われたように、早苗は常連になっただけだ。

何度も通ううちに、ランチタイムの間だけ厨房に調理専門のバイトが入ることや定休日が日曜なこと、土曜は午後二時まで、バイトの卓巳は基本的にランチタイムから五時までだけれど、占いの予約状況によっては閉店までいることなどを知られるようになっていた。それから、透が二十九歳なのも雑談の中で判明した。

「……って言われちゃうと、なんて言い返せばいいのかわからなくて」

「それは、やりにくいですね」

「そうだろうか？」